

富士紀行 (22) 溶岩樹型いろいろ (H12/10/1 記)

須走は既に秋深く、初冬の感すらある。とは言え、富士山麓の紅葉は未だである。富士の紅葉も素晴らしいけれども、富士山麓には富士山麓ならではの名物がある。その一つが所謂溶岩樹型である。

● 溶岩樹型とは

溶岩流の中央部に生じたトンネル状の空洞を「溶岩トンネル」とか「溶岩洞穴」と呼ぶ。これらは、流れやすい玄武岩質の溶岩に特徴的に発達している。流れ下る時の溶岩流は、底面は地表にふれ、側面、表面も空気に触れて冷え固まるので、中央部を通じて、下流へ溶岩を押し出す。供給源からの供給が終わったあと、中央部が下流に流れ去ったあとに、横穴状の空洞が残るので、これを「溶岩トンネル」とか「溶岩洞穴」と呼ぶ。

溶岩トンネルの床面は、多くの場合平坦である。これは、洞内に上流からしぼり出されて来た高湿の二次溶岩流が床面に流れ、縄状紋の見られる平坦な床面が作り出されるからである。

溶岩トンネルで知られるのは、九州五島の福江島、八丈島西山など、ごく一部の、限られた地域にすぎない。

● 富士山の溶岩樹型

○ 風穴、氷穴

富士火山の溶岩流には数多くの溶岩トンネルが見られる。風穴の多くは、冷風を吹き出しているが、これは、地下で冷やされた空気が重くなって、下降気流が生ずるためと言われる。冬の洞内では、壁の割れ目から滴下する水が凍った氷の柱をよく見かける。

夏に、氷穴のように氷ができたり、氷が溶けないほど冷却するのは、トンネル内の細い部分の流れ下って来た空気が、急に広い空間に出て断熱膨張し、洞内の温度が下がるためとも考えられる。

○ 溶岩樹型

森林に流れ込んだ溶岩流に取り込まれた樹木(特に幹の部分)の型を残している空洞のことを、溶岩樹型と呼んでいる。樹幹は燃えて残らず、固まった溶岩流の中に円筒状の空洞が残る。一部に、炭になった木片を残すものや、樹皮、木目などの形を残すものがある。

溶岩樹型は流動性に富んだ玄武岩質溶岩に多く見られる。“丸尾”と呼ばれる薄い溶岩流や、厚い、溶岩流の縁の薄い部分に多い。富士山のスバルライン沿いに顔をみせる剣丸尾、青木ガ原溶岩流、日本ランド付近の東臼塚など寄生火山から流れ出した溶岩流に多くの例がある。

○ 御胎内と溶岩樹型

富士火山の山麓には、御胎内と呼ばれる3つの天然記念物、船津胎内、吉田胎内、印野胎内を含む多くの複合溶岩樹型が見られる。これらは溶岩流に巻き込まれた樹木が大木にひっかかって、複雑な溶岩樹型となって残ったものと言われている。

● 複合溶岩樹型のリスト (地図に記載されているもの)

御殿場市：大野風穴、印野胎内(印野溶岩隧道とも) 駒門風穴、
富士宮市：人穴、万野風穴、
河口湖町：船津胎内

富士吉田市：吉田胎内（樹型）、雁ノ穴
足和田村：竜宮洞穴、コウモリ穴
鳴沢村：鳴沢氷穴、鳴沢の溶岩樹型、大室洞穴、氷穴、
神座風穴付蒲鉾穴及び眼鏡穴
上九一色村：本栖風穴、富士風穴、富岳風穴

☆ 鳴沢氷穴は総延長150mもある溶岩洞穴で、国指定の天然記念物である。
富岳風穴も、天然記念物に指定された洞穴。氷穴よりも構造が単純で、やや広い。
氷筈や鍾乳形のツララがある。
御胎内清宏園は、溶岩樹型の洞穴があり、胎内巡り、2000種の高山植物など、
野鳥のパラダイスで、アカゲラオナガなど珍しい野鳥が見られる。

- 富士山から流れ出た溶岩流によって形成された溶岩洞穴は、山梨県側に圧倒的に多い。
静岡県側は印野胎内（御殿場市）、駒門風穴（御殿場市）、万野風穴（富士宮市）、（御殿場市）であり、御殿場市に集中している。
青木ヶ原樹海には未だ知られざる洞穴が存在するかも知れない。